

# 韋 いへん 編

愛知大学図書館報

No.38

「韋編」……文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物。

## 学生の学習空間としての新名古屋校舎図書館

図書館長 田川 光 照

新名古屋校舎開設まで秒読み段階に入ったと言ってよい。他の部署に先駆けて図書館の移転はすでに始まった。この原稿を書いている9月上旬には名古屋図書館書庫に所蔵していた図書の外部書庫への移管が終わり、9月16日の外部書庫運用開始を待つばかりになっている。移管の第一段階は予定通りに終わったとはいえ、年が明けてからの第二段階に向けて、調整しなければならぬことなどが山積している。

いずれにせよ、来年4月からは、豊橋校舎、新名古屋校舎、車道校舎の3校舎体制の中での図書館運営となるが、車道校舎については、4階の現車道図書館は大学院専用の図書室へと衣替えになる。外部書庫の運用およびこの衣替えにともない、一般社会人への開放のあり方を含め図書館の運用が大きく変わることになる。

新名古屋校舎の図書館はスペースの関係上、少なくとも2015年3月までは研究用図書は外部書庫での運用となり、ブラウジングができないなどの不便が生じる。ただし、研究用図書でも新規に購入するものについては、購入後ただちに外部書庫に送るのではなく1年間は図書館内のひとつのコーナーに置く予定である。とはいえ、図書館内には学生用図書を中心に配架することから、これまで以上に学生の学習空間としての図書館という側面が強くなる。



開館時間については、8時50分から21時までとする方向で調整中である。現名古屋図書館の閉館時間(通常講義期間)は19時であるから、2時間延長することになる。地理的条件を考えると、遅くまで図書館を利用する学生が増えるであろうと予想してのことである。しかし、学生の行動パターンがどのように変わるかは、始まってみないと分からないというのが実情であるので、開設後しばらく様子を見てから再検討する必要が出るかもしれない。とはいえ、重要なことは学生が積極的に利用したくなるような図書館作りをすることであるのは言うまでもない。

\*\*\*\*\*

新名古屋校舎において学生たちの主要な学習空間となるのは、厚生棟1階から3階までを占める図書館と教室棟4階のメディアゾーンである。現名古屋校舎と異なって、図書館とメディアゾーンが空間的に完全に切り離されるため、学生にとって不便な面もあろう。その二つの空間の棲み分け自体はそれほど難しくはない。パソコンや視聴覚資料を中心にした空間かどうかということではほぼ明確に区別できるからである。

しかし、棲み分ければよいというものでもない。たとえば、図書館の資料を参照しながら

パソコンでレポートや論文を作成するというような場合、あるいはインターネットと図書館の資料を同時に使いたいというような場合などが当然あるからである。そのような場合には図書館を利用することになるが、自分のノートパソコンを持っている学生については問題ないものの、持っていない学生に対する対応策を考えておく必要がある。また、大学図書館の中には、iPadを貸し出し、青空文庫からダウンロードした電子書籍を読めるようにしているところもあると聞く。そのような例も参考にしつつ、学習環境を整備していく必要がある。

\*\*\*\*\*

ところで、新名古屋校舎図書館の目玉のひとつとして、「ディスカッション・ルーム」の設置がある。学生がグループ学習をするための空間であるが、現名古屋図書館内のグループ学習室と違って入館してすぐ目につく場所にあり、積極的に利用してもらいたい空間である。3室が作られ、それぞれの特徴付けや運用の仕方について今後詰めなければならないが、学生のグループ学習以外にもいろいろな使い方が考えられうる。その3室の仕切り壁は可動式であるから、1室あるいは2室として使うことも可能である。1室として使えば、参加者が百数十名程度の行事であれば対応でき、学生向けの講演会や、現在名古屋校舎で行われている外国語コンテストやプレゼン・コンテストなどの会場として使うことが考えられよう。

とはいえ、学生が自主的にグループ学習するのに使うというのが基本的な使い方である。この「ディスカッション・ルーム」の設置は、アメリカやイギリスで始まった「ラーニング・commons」というコンセプトが念頭に置かれている。そのコンセプトの背景にはネット世代の学生の台頭があり、その学生たちの学習様式・行動様式に合った学習支援体制を作るということにあったようである。その基本は、快適な環境の中でのグループ学習を通して自ら課題を見だし、解決していくという

自主的で能動的な学習を支援するという点にある。このことからすれば、「ディスカッション・ルーム」は単にグループ学習用の空間として捉えるのではなく、学生たちの学習を支援する空間として捉える必要がある。

もっとも、「学習を支援する空間」という点は「ディスカッション・ルーム」に限らず、図書館そのものについて言えることである。単に学習に必要な資料を揃えたり取り寄せたりするというだけでなく、資料の検索の仕方などについてのアドバイスや、これこれの分野あるいはテーマについて調べたいが関連資料はどの辺りに配架されているかといった質問への対応などは、重要な支援サービスである。ちなみに、今年度名古屋校舎に入学してきた一年生でそのような質問をカウンターでする学生が多く、これはこれまでに見られなかった傾向であると図書館員から聞いている。

この支援サービスをもう一步進めて考えてはどうかと思うのである。たとえば、大学図書館の中には、大学院生スタッフが常駐し、学習上の質問や相談に応じるコーナーを設けているところがある。また、韓国の大学図書館の例であるが、グループ学習用の部屋のひとつに「チュータリング・ルーム」というものを設けているところがある。一人のチューターがついてグループ学習を行うための空間である。

本学では学習・教育支援センターが履修上・学習上の相談に応じるようになってきているが、学生にとってやや敷居が高いのではないだろうか。たとえば、図書館でレポートを作成中に書き方について疑問が生じたといった場合に、すぐその場で気軽に質問できるような仕組み、あるいはグループ学習の際にその場でアドバイスを求めることのできるような仕組みといったものを考えるべきではないかと思うのである。

ところで、新名古屋校舎図書館内には個室ブースが11室作られる。これも目玉のひとつと言えるかもしれない。おしゃべり御法度の静かな図書館というイメージを破るのがワイワイガヤガヤの「ディスカッション・ルーム」であるとすれば、逆にそのイメージを極限化したのが個室ブースである。まさに個室であ

り、誰にも邪魔されずに一人で静かにじっくりと勉強したいという場合には、この部屋を使えばよい。ただし、閉所恐怖症の人には向かないであろう。

この個室ブースの運用の仕方については、今後図書館委員会で検討しなければならない課題のひとつとして残っているが、いずれに

せよ、新名古屋校舎図書館では、従来の閲覧席のほかにそれぞれ特徴のある学習空間を用意している。メディアゾーンを含め、学生にはうまく使い分けてもらいたいと思う。それにつけても、上で触れたような学習支援という観点からの新たな仕組みが必要ではないかと考える次第である。

## 大学生と読書、図書館

法学部教授 大川 四郎

### (一) はじめに

昨年度より私は図書委員を拝命した。このたび、図書館報「韋編」編集部から「何か一文を」との要望が寄せられた。そこで、年寄りの繰言になることを覚悟しつつも、以下では、学生の皆さんに、大学時代に典籍を読んでおくべきこと、図書館を大いに利用すべきことについて、申し上げたい。

### (二) 大学生時代に典籍を読んでおくべきこと

では、大学時代にどのような読書をしておくべきだろうか。私としては、皆さんに特定の方向を強制したくはない。とはいっても、限られた時間を有効に読書に充てるには、何らかの指針があると有益であろう。

この点で一つの指針となるのが、1930年代アメリカの新興シカゴ大学にて、30歳で総長となった法哲学者ロバート・メイナード・ハッチンスが、哲学者モーティマー・J・アドラー、文筆家チャールズ・ヴァン・ドーレンの協力を仰ぎ、開始した「グレート・ブックス」プログラムである。

「グレート・ブックス」とは、古代ギリシアのソクラテスに始まり、20世紀アメリカのジョン・デューイに至るまで、西洋文明の礎となる文筆家74名の諸著作の中から精選した典籍443点のことである。その内容は、文学から哲学、自然科学にまでおよんでいる。このプロ

グラムでは、総長自らアドラーと共に、ソクラテス・メソッドを使い、テーマごとに選定した典籍英訳テキストを講読し、各論者の意見を比較対照して、西洋文明の基盤が対話にあることを、受講者らに理解させようとした(1)。この試みは大成功を取めた。当時カリフォルニア大学バークレー校に学生として在籍していたスーザン・ゾントーク女史が、評判を聞きつけ、新興シカゴ大学に転学してきたほどである。広く全米に普及させようという趣旨で、プログラムで使用された典籍の英訳が、シカゴ大学と連携したエンサイクロペディア・ブリタニカ社から、全60巻から成る、西洋古典英訳シリーズ "Great books of the Western World" として刊行された(2)。

このシリーズは2つの産物をもたらした。第1は、全60巻を1冊に縮刷した『西洋思想の偉大な宝庫』(3)である。テーマごとに、シリーズの中の典籍から関連する箇所を抜粋したアンソロジー形式になっており、読者は諸論者らと共に伝統ある討議に参加できる構成になっている。第2は、膨大なシリーズを効率よく読み進むために、優れた読書案内書が編まれたことである。これが、前述のアドラーと、エンサイクロペディア・ブリタニカ社の編集者チャールズ・ヴァン・ドーレンとの共著である、『いかに本を読むか』(4)である。

意欲のある学生の皆さんは、高校までに習得した英語力を総動員して、「グレート・ブックス」シリーズあるいは『西洋思想の偉大な宝庫』に挑戦してみたい。英語と聞いて敬遠する向きには、岩波文庫、「世界の名著」（中央公論社）、「人類の知的遺産」（講談社）各シリーズに所収されている既刊の邦訳西洋古典を利用されるとよい。望むらくは、私達は日本人なのであるから、日本、そして中国の典籍にも親しんでおくべきであろう。これについては、岩波文庫、「日本の名著」（中央公論社）、「日本思想大系」（岩波書店）、「新釈漢文大系」（明治書院）各シリーズがある。そうすることにより、「孤独な書齋に、古今東西の」賢人を「招聘し賑やかに意見の交換ができる」(5)はずである。

### (三) 図書館の利用について

個人で所有できる蔵書数にはスペースの点から言っても、財政的にも限りがある。そこで、図書館を利用するに越したことはない。かつて大学生であった私がそうであったように、現在の学生の皆さんの大半にとっても、図書館とは、自分が関心ある図書を静かに閲覧（読書）する書齋の場であり、あるいは借り出す無料貸本屋であろう。試験期間前そしてその真最中には、格好の自習室ともなろう。また、図書館では、書架から興味ある図書を手にとり、拾い読みしていく自由閲覧（ブラウジング）をしていると、意外な着想に恵まれることがある。

だが、図書館の持っているもう一つの重要な機能は、情報を収集し、これをもとにオリジナルな思想を創造する場でもある、ということだ。演習で課せられた報告や、あるいは、卒業論文執筆の準備で、図書館を利用する場合がこれにあたる。まず、図書館には、同じテーマについて、様々な立場の論者により書き著された図書が所蔵されている。これらの文献を参照することにより、現状での問題状況を整理することができるであろう。ところが、更に一步踏み込み、多少なりとも創造的なりサーチを始めると、たちまち利用できる文献に枯渇してしまう。学生の皆さんの中でも、学部卒業論文、大学院修士・博士論文を現に執筆中の方、また、教員の先生方ならば、思い当

たることが多いのではないか。むしろ、必要とするデータが直接には出てこないとか、愛知大学図書館に該当する文献が所蔵されていないという状態の方が当たり前なのである。また、インターネット上で、かなりの情報を得ることができるが、必ずしも総てのデータが信頼できるとは限らない(6)。

このような場合に、役立つのが図書館のレファレンス・サービスである。図書館職員の方々が、専門の書誌的知識を駆使し、さらには長年の経験に裏打ちされた勘を働かせて、利用者が必要としているデータや、文献を探し出してくれる。私ども研究者の場合、図書館というと、むしろこのレファレンス・サービスに恩恵をこうむっていることが多い。

19世紀末に亡命先のロンドンで、カール・マルクスが、その思想を未完の大著『資本論』にまとめあげるにあたり、長年毎日、大英博物館図書館閲覧室に通っていたエピソードは、有名である。彼は、図書館所蔵の文献から膨大な抜書きを作り、それらを分析し、資本主義経済体制のカラクリを明かしてみせた。この研究は、当時、閲覧室に勤務していた司書らから、その該博な書誌知識に裏付けされたレファレンス・サービスの提供がなければ、不可能であったろう(7)。図書館の創造的な利用の好例である。

我が愛知大学図書館には、大英帝国博物館のような無尽蔵の蔵書はない。しかし、時間を要するとはいえ、国内外図書館間での相互貸借制度により、必要とする文献の実物、あるいは該当箇所のコピーを取り寄せることができる。また、ゼミでのレポートや卒業論文のテーマに関わる文献・資料のことで、参考カウンターで相談しても、図書館事務課の職員の皆さんがすぐに対応できないことがあろう。だが、あきらめてはいけない。私の経験では、事務課の皆さんが、周辺大学図書館のレファレンス担当者の方々に相談するなどして、何らかの対応をして下さった(8)。こうしたサービスは、電子メール等を駆使することにより、私の学部学生時代に比べ、格段に早くなっている。要するに、身近な愛知大学図書館を通じて、私たちは広く全世界の知識網につながっている(9)。学生の皆さんは、大いに図書館を利用し、知的創造に挑戦してほしい。

## (四) むすびに

学生の皆さんには、大学在学中は無論、卒業後も読書を続けて思索を深め、心豊かな生活をおくって下さることを私は願っている。

\*\*\*\*\*

注)

(1) 「グレイト・ブックス」プログラムの経緯については、次の文献を参照されたい。Cf., Alex Beam, “A Great Idea at the time – The Rise, Fall, and Curious Afterlife of the Great Books”, PublicAffairs, New York, 2008.

(2) 本学図書館に所蔵されている。ちなみに、読書家でもあった俳優の故児玉清さんは、俳優としてまだ駆け出し時代に、大枚をはたき、この「グレイト・ブックス」シリーズを購入している。事前に相談すらしなかったことを、新婚間もない夫人からなじられると、「こういう本は女房を質に入れても買うべき本なのだ」と児玉さんは言っていた。このため、しばらく夫婦仲がぎくしゃくしたとのことである(児玉清著『寝ても覚めても本の虫』、新潮文庫、2007年、pp.353-355)。「女房を質に入れて」でも本を買うとは明らかに言い過ぎであるが、「稀代の本の目利き」であった児玉さんらしいエピソードである。

(3) "Great treasury of Western thought: a compendium of important statements on man and his institutions by the great thinkers in Western history", edited by Mortimer J. Adler and Charles Van Doren, Bowker, New York, 1977, xxv+1771p. 本学図書館に所蔵されている。

(4) Mortimer J. Adler/Charles Van Doren, “How to read a book – the classic guide to intelligent reading (revised and updated edition)”, A Touchstone Book, published by Simon & Schuster, New York/London/Toronto/Sydney, 1972. 本学では豊橋図書館に1967年版が所蔵されている。我国では、外山滋比古・榎未知子共訳『本を読む本』(講談社学術文庫、1997年)として出版されている。原著第3編「様々な種類の本へのアプローチ方法」では、文学、戯曲、歴史、自然科学、哲学、社会科学各分野にわたって、読書方法が懇切丁寧に叙述されている。講談社学術文庫版では、文学分野しか訳出されておらず、残念である。

(5) 國原吉之助著『ラテン詩への誘い』、大学書林、2009年、p.284.

(6) 本学文学部で図書館情報学を講じておられる時実象一教授の一文を参照されたい(時実象一「ウィキペディア 安易な引用はやめよう」、2007年7月24日付朝日新聞日刊第15面コラム「私の視点」)。

(7) 当時、閲覧室監督官であったリチャード・ガーネットは、その豊富な書誌知識を、分け隔てなく利用者らに提供していた。このため、ここを訪れる外国人研究者らに高く評価されていたという。マルクス、そしてその仕事を手伝っていた末娘エレノアもそれら利用者に含まれるであろう(松居竜五・小山騰・牧田健史共著『達人たちの大英博物館』、講談社メティエ、講談社、1996年、pp. 71-72, 244-245. 藤野幸雄・藤野寛之共著『図書館を育てた人々 イギリス編 (JLA図書館実践シリーズ第8巻)』、日本図書館協会、2007年、pp.74-80. Cf., art.' Garnett, Richard (1789-1850)' by Alan Bell, in "Oxford Dictionary of National Biography" edited by H.C.C. Matthew and Brian Harrison, volume 21, Oxford University Press, pp.500-503, especially p.501; Letter from Eleanor Marx to Jenny Marx dated [London] 2 October 1882, in "The Daughters of Karl Marx - Family Correspondence 1866-1898", commentary and notes by Olga Meier, translated from French into English and adapted by Faith Evans, with introduction by Sheila Rowbotham, Penguin Books, London, 1984, pp.157-158.)。だが、本稿をまとめるために、私はガーネットについての言及をマルクスゆかりの文献の中で探したが、見つけることができなかった。なお、大英博物館におけるマルクスのエピソードを伝える文献として、我国でしばしば引用されるのが、ヴァルター・ヴィクトル著『マルクス伝』である(ヴァルター・ヴィクトル著長坂聡・小島恒久・原田溥共訳『マルクス・エンゲルス小伝』、1966年、労働大学新書72、労働大学発行、pp.46-47. Cf., Walther VICTOR, "Karl Marx", 1953, Der Kinderbuchverlag, Berlin, pp.49-50)。だが、この伝記は、旧東ドイツで出版された、子供向けプロパガンダ文献である。典拠は示されていない。ガーネットの名前も出てこない。このエピソードを調べるにあたり、名古屋図書館事務課職員の伊藤孝司さんの御世話になった。ここに記して

御礼申し上げます。

(8)図書館のレファレンス業務の場合、利用者からの相談(リクエスト)により、鍛えられていくという側面が強い。数々の工夫で、利用率全国一を誇る千葉県の浦安市立図書館の場合もそうである。今までのレファレンス事例をもとに、サービス向上に役立っているという(鈴木康之・坪井賢一共著『浦安図書館を支える人びと』、日本図書館協会、2004年、pp.10-22)。だが、近年、愛知大学では、諸般の事情により、司書資格をもっている事務職員が必ずしも図書館事務課に配置されるとは限らなくなっている。さらに、人件費節約という理由から、図書館事務課職員のうち、専任職員数が大幅に少なくなっている。これらの理由から、今後、レファレンス・サービスが低下するのではないかと私は憂慮している。

(9)戦後発足した国立国会図書館を中心に、国内

各種図書館がネットワークで結びつけられ、誰もが最寄りの図書館からあらゆる知識にアクセスできるようになっている。このような図書館制度作りに尽力した中井正一(国立国会図書館初代副館長、1900-1952)は、次のように延べている。「国立国会図書館は……(中略)……大きな集団として……(中略)……個人の記憶のかわりに資料の精密を極めた整理目録を用意せんとしている。個人の思惟に代って、委員会をもっている。何十年もの間の国家の如何なる出来事も記憶し、どんな天才よりも広汎な知識と意欲をもつ巨人となって、自らを創造しようとしている」(中井正一「真理は我等を自由にする」、昭和23年10月13日、国立国会図書館職員研修特別講義速記録(中井浩編『中井正一 論理とその実践 —組織論から図書館像へ—』、1972年、てんびん社、pp.91-92)。

## 地域研究コースから地域政策学部へ

地域政策学部教授 阿部 聖



早いもので愛知大学に赴任して11年目になる。経済学部の日本経済史担当として採用されて10年間お世話になり、今年の四月からは、新しく生まれた地域政策学部の一員となった。

以下、図書館とのかかわりで経済学部の10年と移籍ついてふり返ってみたい。

経済学部では地域研究コースに所属した。当初は、なぜ地域研究コースかという思いもあった。赴任直後わかったことだが、2年後には新しいカリキュラムが実施されることに決まり、私は近現代日本経済史の他に地域経済史という科目を担当することになっていた。地域経済や産業の歴史についての科目の担当をも期待しての募集だったのである。

それまでの私の主要な研究テーマは、日本の石油産業発達史で、とくに輸入原油精製や石油資源開発の展開過程、それと関連した石油政策に関するものだった。また、13年間在籍した前任校が浜松市にあったこともあり、かつて同地域の三大産業といわれた繊維(染織)、楽器(ピアノ)、機械(織機・自動車)などの産業史を研究テーマの一つに加えていた。

そうはいつでも、地域研究コースの所属教員として地域経済史や専門演習を担当するというはかなり工夫や準備が必要と考えられた。隣接しているとはいえ、東海ないし三河地域についてはほとんど何も知らないと同然であった。地域経済史の内容をどうするか、専門演習の内容を地域とどう結び付けるかは、私にとって大きな問題だった。ただ、学部の配慮で専門演習も赴任後3年目から担当することにしていただいたので、そ

の期間を授業準備のために利用することができた。

当然のことながら図書館に、そして中部地方産業研究所(以下、中産研)、総合郷土研究所(以下、郷土研)の図書室に通い、地域経済、地域産業関係の文献・資料を読みあさった。図書館では基礎資料や統計の存在について確認した。中産研、郷土研には先輩諸先生方が残してくれた地域経済・産業に関する文献・調査報告・資料、社史等がたくさんあってイメージを膨らませるのに役立った。

とくに玉城肇先生の三河ないし東海地域の産業に関する一連の業績は刺激となり、また一つの目標ともなった。恥ずかしながら、先生についての私の知識は、財閥研究者、M.ペリー「日本遠征記」の翻訳者(土屋喬雄氏との共訳)といった程度に過ぎなかった。先生が本学の学長を務めた人だということ、そしてもともとは家族制度史や女性史をテーマとし、それ以外にも教育史や芸術論など数多くの業績や翻訳を残していたことを、この時はじめて知った。

ちなみに、先生の地域産業に関する業績には『三河地方における産業発達史概説』(中産研、昭和30年)、『明治中期における愛知県の産業』(中産研、昭和41年)、『豊橋地方における特殊産業の由来』(中産研、昭和49年)や松坂屋の伊藤家や神野家についての研究成果であり、遺作となった『地方財閥と同族結合』(御茶ノ水書房、昭和56年)などがある。

他方で、図書館の地域産業に関する基礎資料、例えば『明治前期産業発達史資料』、『府県統計書(愛知県統計書など)』『営業報告書集成』やそれらの資料を利用した研究論文などに目を通しながら気づいたこともいくつかあった。例えば、石井寛治氏が『帝国統計年鑑』『農商務統計表』等から作成した地域別鉱工業賃金労働者数によれば、日本の産業革命がスタートしたといわれる明治19年には、東山地域(長野、岐阜、山梨)に21,513人という近畿や南関東を上回る日本で最も多い賃金労働者が集中していた。同年の東海地域(愛知、三重、静岡)の賃金労働者数は、東山地域の4分の1程度に過ぎなかった。東海地域が近畿、北九州、南関東とともに四大工業地域を形成

し、それにふさわしい労働者数を擁するようになるのは、その後の産業化の進展に負うところが大きかった。

また、山口和雄氏の作成による「明治七年府県物産表」(全国平均)によれば、総生産額の農工別割合は農産物61.0%、工産物30.0%、その他9.0%である。農産物に占める米の割合は62.8%、工産物に占める醸造物類(酒類、醤油、味噌)が27.8%、織物類が16.6%となっている。同表の原資料を利用して愛知県だけを見ると、総生産額の割合は、農産物62.4%、工産物32.2%、原始生産物5.4%である。ただし、米の割合は55.5%と低く、棉類が12.7%で全国平均を大きく上回っている。そして工産物の内訳は醸造物類が46.8%、織物類16.9%、綿糸類3.1%などとなっている。

この事実は、愛知県では、主要農産物である米、麦、棉類などが、そのまま消費されたり移出されたりするのではなく、不足分はよそから移入して酒、醤油、味噌、そして綿糸や綿織物などの工産物に加工されていたことを示す。その意味では、のちの産業化の基盤がかなりの程度まで形成されていたと考えることができる。

こうした準備過程を経て、地域経済史や専門演習の内容をどうするかについての私なりの結論を出した。地域経済史については、できるだけ一つの地域を総体的に検討することが重要だと考えるようになっていた。その結果、愛知県を中心とする東海地域の産業発展史を、紡績産業だけでなく製糸業、醸造業、染織業、機械産業、食品産業、陶磁器産業といった諸産業を取り上げるとともに、鉄道、電力、通信といったインフラの発展過程を盛り込むことにした。というのは、地域経済史とか地域産業史といった研究書やテキストも散見されるようになっていたが、内容的には日本各地の代表的な産業研究の寄せ集めといったものが多かったからでもある。

対象とする時期は、明治初期から愛知県で自動車産業が産声をあげる昭和初期までとした。これにより愛知県がいわゆる"モノづくりのメッカ"というふうないい方をされる製造業優位の地位を確立するにいたった経緯の一端を学生たちに伝えることができる

と考えた。

また、専門演習については、とくに戦後日本経済発展史を勉強しながら、それを地域経済や産業の発展や衰退とどう関連してきたかについての勉強に重点を置くことにした。そのためにはやはり夏休み等を利用した工場見学や施設見学というかたちで大学の外へ出て、地域産業の歴史や現状を知ることが重要だと考えた。

地域研究を大学生活の柱の一つに位置付けて以後、これまで心がけたことが三つあった。一つ目は、地域研究のための基礎資料を収集すること。この点では『営業報告書集成』の第5集(東京大学所蔵分)以降を春の共通費を利用して図書館に入れてもらうことにした。同資料には大企業だけでなく地方企業・銀行・鉄道等の営業報告書が収められている。来年度には第5集分の購入が終わる。

二つ目は、中産研を研究活動の拠点の一つとして位置付けること。これまで中産研の研究プロジェクトに参加して、地域経済や産業についての共同研究を進めてきた。とくに中部地域企業の海外進出についての現地調査

には力を入れている。また、公的機関や民間研究機関が刊行する報告書や地域企業の社史の収集に努めている。

三つ目は、専門演習の夏合宿(2泊3日)で地域の工場や施設見学を毎年実施すること。専門演習を担当した2003年からテーマを決めて工場・施設見学を実施し、見学先もすでに50カ所を越えた。報告書等の作成は、学生の図書館利用にも少なからず役立っていると思う。

一昨年、経済学部の人間環境コースと地域研究コースの教員が移籍する新学部、すなわち地域政策学部設置構想がもちあがった。経済学部に残るか、新学部に移籍するかについてはそれほど悩まなかった、と言えようそのようになるが。移籍を決めたのは、地域政策学部がこれまで経済学部地域研究コースでやってきたことの延長線上にあるような気がしたことが大きい。ただ、これまで以上に地域経済(産業)史や専門演習の内容を充実させていく必要があるだろう。それに比例して図書館とのお付き合いの度合いも増していくと思われる。よろしく願うするしだいである。

## 本との関わり

会計研究科教授 粥川 和枝



自分と本の関わりを考えると、まずは、専門の会計学の本があげられるだろう。会計学の分野は、近年、国際化が非常にめざましい。国内会計基準と国際財務報告基準(IFRS)とのコンバージェンス(共通化)、さらにはIFRSのアドプション(強制適用)が中心的な問題となっている。わが国においてもIFRSの影響により、会計基準の新設・改訂が著しく、それに

対応して多くの本が出版・改定されている。勉強のために、これまで以上に多くの新しい本を手に入れることが必要となっている。

有り難いことに最近は、机の前にいながら、Amazonや各書店のホームページ等から簡単に本が手に入るようになった。論文についても、CiNii(国立情報学研究所)等のデータベースを利用して、論文全文のPDFの閲覧が可能なものもある。

ただ便利になった分、以前に比べて図書館に出向く回数が減ったことは残念なことである。図書館では、学生の頃、論文を書くため

に1日中図書館に籠って必要な論文をコピーし続けたこと、本を読んだり勉強したりしたことがなつかしく思い出される。今でも図書館の空気は、自分を落ち着かせ、勉強に向かわせてくれるものを持っている。

本や論文を手に入れた後は、新しい知識を得るためそれらを読むことになる。論文を書くに際しても、まずは読むことから始まる。研究指導の学生にも、「書くことは読むこと」と教えている。たくさんの文献を読むことによって必要な知識を蓄え、やっと書くことを始めることができるのである。

このように、私が本を読む機会は、仕事を中心となっているのが現状である。だから、時間のある時は、学生時代は小説等も読んだができるだけ本は読まず、スポーツをする等其他のことをするようにしてきた。しかし最近、読書家の娘の影響もあり、会計学以外の本を読むようになってきた。仕事で本をたくさん読んでいたのだから、とにかく文字はもういいという気持ちになっていたが、小説を読むことを再開したら思いのほか楽しくリラックスできたのである。

最近読んだ本としては、娘からもらった『ハナミズキ』、『食堂かたつむり』等がある。『ハナミズキ』は、自身の夢のために東京の大学に進んだ主人公と、故郷に残り漁師になった恋人が、互いを思いながらもすれ違っていくが、10年後故郷のハナミズキが咲く頃、二人に再会の奇跡が訪れるという物語である。また、『食堂かたつむり』は、都会で心に傷を負った主人公が山間の故郷に戻り、1日1組のお客様だけをもてなす、決まったメニューのない小さな食堂を始めるという内容である。両方とも映画化されており、女子学生のみなさんにおすすめの本である。自分で選んだ本としては、『満ちたりぬ月』、『つめたいよるに』、『瑠璃でもなく、玻璃でもなく』、『風花』等がある。寝る前の30分間ほど読むのであるが、あまり重い内容の本は好まない。

この原稿を書くに当たって気付いたのであるが、どうも私は女性作家の本、あるいは女性が主人公の本ばかり好んで読んでいるようである。そこで、芥川賞・直木賞作家の中で、どのくらい女性の作家がいるのかを調

べてみることにした。

芥川賞は現在まで145回を数えているが、私が調べた限りでは、第8回の中里恒子『乗合馬車』を始まりに150名中39名が女性受賞者となっている。直木賞の方も現在まで145回を数え、第11回の堤千代『小指』から173名中39名が女性であり、両方合わせると4分の1程度が女性作家となっている。

とくに、近年は、女性作家の受賞が増加傾向にあるようである。たとえば、2000年以降の芥川賞をみても、大道珠貴、金原ひとみ、綿矢りさ、絲山秋子、青山七恵、川上未映子、楊逸、津村紀久子、赤染晶子、朝吹真理子となっている。直木賞では、山本文緒、唯川恵、村山由佳、江國香織、角田光代、三浦しをん、森絵都、松井今朝子、桜庭一樹、井上荒野、中島京子、木内昇というように、多くの女性が受賞している。私が読んできた本には、純文学中心の芥川賞のものは非常に少ないが、直木賞のものはたくさん含まれている。中島京子の『小さいおうち』、江國香織『号泣する準備はできていた』、唯川恵『肩ごしの恋人』等、どれも女性を主人公にした面白い作品であった。

女性作家の受賞増加は、同性として嬉しいかぎりである。その理由はいろいろとあるだろうが、同性の作家による同性を主人公にした内容に共感しやすく、多くの女性がそれらの本を手取るようになったこともその一つにあげられるのではないだろうか。私自身も、本を読みながら、同性の主人公と自分の考えを比べたり、自分の人生を考えてみたりしているように思える。

もちろん、これからも私にとって本を読むことは仕事であり、読む本の多くは会計学の本になるであろう。しかし、趣味としても、小説等の本を読むことは、私にとって非常に有意義な時間となっている。趣味の読書としては楽しいことが一番なので、これからも内容が軽い偏っているといわれても、自分の読みたい本を読んでいこうと思うのである。

## シリーズ学会紹介 「経営学会」について

経営学会会務委員 玉置 光司

愛知大学経営学会は、経営学ならびに関連諸科学の学術的研究およびその発展を促進することを目的として、1992年に設立されました。活動の概要は次の4点です。

第1は紀要『愛知大学経営論集』の発行です。経営学会は正会員(経営学部教員)と学生会員(経営学部学生・大学院生)から構成されています。正確に言うと、少数の準会員もいます。紀要は教員の研究成果発表の場となっていて、年2回刊行しています。同時に、全国の主要な大学と紀要の交換を行っています。

第2が講演会、ワークショップへの助成です。講演会はどこらかと言えば専門性が高い話が中心です。経営学研究科(大学院)は講演会等を開催する独自の予算を持っていないので、それを補完する意味もあります。ワークショップは、あるテーマについて全国から研究者が集まって集中的に討議し、情報交換する場となります。

第3が関連書籍や雑誌の収集およびパソコンソフト類の整備です。以上は正会員へのサービスが中心ですが、学生諸君に対する支援が第4として挙げられます。具体的には、優秀な卒業論文に対して、「学会賞」や「努力賞」を授与してその榮譽を称えるというものです。演習指導教官の推薦に基づき教授会が最終決定します。また、学生諸君は入学時に自動的に学生会員になっているので、紀要を無料で受け取ることが出来ます。

現在、経営学会室は名古屋校舎(みよし市)にありますが、2012年度からは新名古屋校舎に移ります。5学会(経営学会、経済学会、法学会、国際コミュニケーション学会、現代中国学会)が1部屋に集まりますので、経営学にとどまらず、他学会の書籍も見られます。関心ある学生諸君は是非のぞいてみてください。特に経営学会のコーナーには過去の学会賞受賞論文が保管されていますので、それを見るこ

とは、自分の論文を作成する上で大いに参考になるでしょう。

会務委員を長年務めていて、最近気になっていることがあります。紀要の刊行回数を年4回に増やす学会があるなかで、経営学会は年2回の原稿を集めるのに苦勞しています。毎号、100ページを超えることを目標としていますが、通常(原稿)募集案内だけではそれに達しない事態がたびたび起こっています。十分な原稿が集まらない場合は協力が期待できそうな会員に特別に声をかけたりしますが、それでも駄目な場合には会務委員が急遽投稿してボリュームを増やし体裁を整えるということも時々あります。

これは正常な姿とはいえないでしょう。いつまでもこのような状況が続くようであれば、何らかの対策を講じなければなりません。しかし、もし、原稿の集まりの悪さが、学外の雑誌に掲載する機会が増えたことの反映であれば、これは大変歓迎すべき現象だと筆者は考えます。評価が確立した学外雑誌であれば、より広い範囲に影響を与えることが出来るからです。紀要は教員であれば誰もが掲載でき大変便利ですが、そのぶん、内容は玉石混交になりがちで、評価が確立しているとは言い難い面があります。日本の各大学が紀要(特に文系)を持つに至った歴史的経緯を詳しくは知りませんが、専門性の高い論文の投稿先を見つけるのが困難と言う事情が当初あったかと推察します。しかし、学問も国際化、グローバル化の波にさらされ、競争の激しい分野ではこのような困難はある意味で解消されてきています。すなわち、国際誌まで視野に入れば、専門誌への投稿は原則オープンで、誰もが自由に投稿できるようになってきています。経営学も分野が多岐に渡り、それぞれ事情が異なるので、一概には言えませんが、今後は、学外雑誌への投稿が増え、紀要はその役割

を漸次縮小していくのかもしれませんが。しかし、もし、原稿の集まりの悪さが単に研究成果が乏しくなっていることの反映だとすれば、由々しき事態が起こっていることとなります。今後は論文の質ということも含めて、特に若い先生方を中心に紀要の在り方を議論していく必要があると思います。

「韋編」編集部の求めに応じて、経営学会に

ついて紹介することになりました。学会の簡単な事業紹介の後、紀要の現状についても触れました。このような場所で触れるのは不適切な気もしましたが、折角の機会なので利用させていただきました。経営学部教員の皆様のお考えを会務委員までお寄せいただければ有難いです。

## コレクション紹介 「竹村文庫」について

文学部教授 鈴木 立子



本学にある「竹村文庫」は旧制浦和高等学校教授竹村昌次氏の旧蔵書であり、1664年から1938年に刊行された欧文図書からなっている。概要は、ヨーロッパ、アジアの文化、歴史、宗教に関する概説書、研究書、アジア諸語の欧文訳、及び各地に派遣された使節、宣教師、探検家の報告書である。若干の書籍には購買年月日が記され(早いものは明治36年とある)、日付とともに「Parisニテ求之」と書かれているものもある。

竹村氏の蔵書が愛知大学に寄贈されたのは1953年5月28日であることは『愛知大学五十年史』に記されている。愛知大学非常勤講師武井義和氏に当時の記録を探していただいたが、今のところその経緯を示す文書は見つけれられていない。竹村氏は1942年4月(『朝日新聞』4月6日朝刊 下記成田氏情報提供)に67歳でなくなっており、本人の意思による寄贈ではあるまい。寄贈のいきさつを探している中で明らかになった竹村昌次氏について先ず述べてみよう。

竹村昌次氏とは

『旧制浦和高等学校同窓会 会員録 昭和15年版』・『旧制浦和高等学校生徒名簿』によると在職期間は1922年から1939年であり、1936年まで文科の教授、1937年から39年までは講師とある。担当教科は歴史であり、1925年・26年には在外研究に出ており、1933年には東京高等学校の教授を兼任している(以上は、埼玉大学研究協力部図書情報課、情報サービスチーム、成田義樹氏に調査していただいた)。旧制浦和高等学校は1922年4月に最初の入学者を迎えており、発足当時から浦和高校で教鞭を執っていたことになる。1936年11月に当時の校長が職務中に死亡したが、その際「竹村昌次教授を校長事務取り扱いとした」(『読売新聞』11月21日朝刊)とあり、37年以降講師とあるのはそれと関係があるのではないかと推測される。また浦和高校に任命される前の情報は混乱しているところもあるが、維新史料編纂官であったと思われる。在外研究がフランス、ドイツ、イギリス、アメリカで行われたことは、『支那時報』巻5, 3号(大正15年9月)の竹村昌次「獨佛の東洋文化研究熱」と題した一文からわかる(但し、竹村の著はない。武井氏情報提供)。

一方、東京大学文学部西洋史学科卒業生名簿に1902年(明治35年)7月卒業とある竹村昌次なる人物がおり、1901年に史学会の会員となっている。日本に近代歴史学をもたらしたリースの最後の学生の一人であったようだ。

財団法人東洋文庫に所蔵されている那珂通世(1898-1904年、東京帝国大学講師)が1901年(明治34年)に東京大学で行った『支那近世史』の講義ノートの筆者の竹村昌次は彼であろう。これは中山久四郎(1899年東洋史学科卒業)により東洋文庫に寄贈されている。すでに卒業していた中山が旧知の竹村から講義録を譲り受けたものであろうか。この講義はチンギス・カンの出現からモンゴル国の形成にかかわるものである。那珂は『支那通史』(明治21-23年刊行)を書いた際に明代に編纂された『元史』の不備に気づき、モンゴル史研究をはじめ、最初の成果を『東洋小史』(明治36年1月出版)としてあらわした。活字にする前の最新の研究成果を示した講義であったことがノートから窺われる。その後、那珂のモンゴル史研究は不朽の名著となった『成吉思汗實録』として結実した。この人物と「竹村文庫」の竹村昌次氏とを同一人物と考えたいが確証があるわけではない。ノートと蔵書にある氏の覚書などから筆跡鑑定は可能であろう。

竹村氏についての二系統の情報は現在のところ以上につきる。いずれにしても愛知大学に蔵書が寄贈された理由を示唆するものはない。『支那時報』に記事があることから、武井氏は東亜同文書院関係者との縁を考えられる。しかし竹村氏の生徒には歴史研究者も何人かおり、書物の性格から彼らが仲介の労を執った可能性もあると私は思っている。

#### 「竹村文庫」の特徴

限られた時期に蒐集された個人蔵書はその個人の研究動向・関心を示すことは謂うまでもないが、時代の要請などが垣間見えるおもしろさがある。本文庫でも、西欧諸国と植民地との関係を主題としたもの、ロシアの政治・歴史に関わる書が目につき、植民地政策が重要な時代であったこと、西欧にとっても日本にとってもロシアが大きな存在になってきた時代に蒐集されたことを反映している。

しかし本文庫の特徴として先ず挙げられるべき事は、西欧諸国家や布教教団が世界各地に派遣した使節の報告書や個人旅行の記録などが多いことである。その中には法顯(5世紀)の『佛國記』など非欧米人による著書の翻訳も含まれている。とりわけ各国の旅行記、報告書やその要約(翻訳も含む)を収録したフ

ランスで出版された叢書が5部あることは注目に値しよう。これだけ一箇所に揃っているのは国内では他にないのではないか。それらは古いものは1749年(64vols.)に、ほかは1780(23vols.)、1790(5vols.)、1833(46vols.)、1841(12vols.)年に刊行され、見る如く非常に大部なものもある。

遑れば「大航海時代」が始まるや、各国の新航路開発や植民地争奪戦の中で現地の事情や航路に関する情報収集は不可欠になった。16世紀にはすでにヴェネツィアのラムージオ、イギリスのハクルートなどが古い旅行記や公的・私的な探検の報告書を編纂した。またフランスでは18世紀に中国など各地に派遣された宣教師の手紙が逐次公開させてられている(本文庫にもそれらから編纂したものがある)。しかし他者を知ることに情熱を燃やしたのは、必ずしも政治的・実用的な要請だけではなかった。侵略・進出・布教は他者の文明・文化を知り、文明を比較研究する契機ともなった。フランスでは17世紀に学識ある宣教師を中国に派遣し、中国に関する知識を積極的に集めている。現地に足を踏み入れた者の報告のみがアジアを初めとした諸地域を知る手がかりの時代であった。叢書の出版の目的に、「歴史・統治(政治)・宗教に関かわることを知る」とうたっているものもあるが、それを示していよう。また本文庫にある19世紀に出た個々の報告書についても、早いものでは使節や旅行が終わって1年足らずで書籍として刊行されている。

書籍の存在からそれを必要としてきた時代背景を述べたが、これらの書物は「他者」とされた側にとっても大きな意味がある。他者であるヨーロッパ人から見たアジアやアフリカ、あるいは同じヨーロッパの中でも他国についての観察は、見慣れた者には気がつかない点、あるいはことさら記録する必要を認めなかったものに光を当てた。それ故に古くから歴史学の第一資料として使われてきたのである。しかしまだその利用は充分ではない。本文庫のようにある程度まとまって収録されている利点は、これらの記録を一括して検討することができることである。その結果、歴史を知るための新しい観点への道を開いてくれもする。この点から本文庫の書籍をあらためて紐解いてみたいものである。

## 卒論と友達と図書館

文学研究科 羽柴 亜弥



学部生の皆さんの大学生活における1番の難関といえば卒業論文でしょう。

私は誘惑に弱い性格で、家にいるとテレビや漫画、睡眠などに流されてなかなか卒論が手につきませんでした。これではいけ

ないと思い、毎日図書館に通いました。やはり、図書館は勉強する環境が整っており、断然集中して卒論を進めることが出来ました。10月頃からは毎日開館から閉館まで図書館にこもりました。本当に毎日パソコンに向かって、焦りや不安などを抱え辛い毎日でした。

その辛い毎日を乗り越えることが出来たのは友達のおかげです。環境ももちろん大切ですが、私が思う図書館に通って卒論を書く最大のメリットは友達に会えるということです。私は最初友達に会ってしまい、おしゃべりして卒論が進まないことを心配していました。それは全く逆でした。友達がいたからこそ書きあげることができたのです。日本史中世のゼミの場合、ほとんどのゼミ生が図書館で卒論をやっていました。みんなが頑張っている姿を見ていると自分も頑張ろうという気持ちになります。行き詰まったときは相談をしました。アドバイスはなくても、友達に話すだけで頭が整理されてやるべきことが見えてきました。時には愚痴を言い合い、励ましあって、なんとか全員無事卒論を提出することができました。

図書館での勉強のいいところは友達と一緒に頑張れるということだと思います。確かにラウンジのようにおしゃべりにくくするのはいけないことです。しかし、課題や各自の勉強をしていく中で、意見交換や討論することはとても大切なことです。大学の図書館なので特に必要な環境です。その反面静かな環境も求められます。難しいですが両立できたらいいと思います。

皆さんも図書館をおおいに活用をして卒業論文頑張ってください。

## 映像資料の活用

中国研究科修士課程 佐藤 一道



学部生のときから名古屋図書館を利用している。必要な本はOPAC(蔵書検索システム)を活用し、ただちに手にすることができた。しかし、私にとって図書館に行く本当の楽しみは書籍の森に迷

い込むことであった。目的の本を探すのではなく、とりとめもなく歩き、背表紙に書かれた表題を読んでいく。私たち人類はなんと深くかつ多岐にわたって思索してきたのだろう。知の集積に圧倒されながら、私は書籍の森をさまよった。

それとは別に、名古屋図書館は映像資料も調べている。私の学部卒業研究はこの映像資料を使用した。

満洲国の国策会社、満映が作った映画は約1000本あった。その大量のフィルムは40年近く行方不明になっていた。ところが1985年のペレストロイカによって、満映フィルムが旧ソ連にあることが判明した。ロシア国立映像資料館がモスクワ郊外にあり、満映フィルムはそこに秘蔵されていた。

1995年、(株)テンシャープ0がロシア国立映像資料館から日本に持ち帰ったフィルムをビデオ化した。幸い、そのビデオが名古屋図書館に『映像の証言 満州の記録』30巻、『満洲ニュース映画』10巻として揃っていた。

私は毎日、AV自習室に通い全巻を視聴して卒業研究を完成させた。AV自習室の設備は、戦中この映画を見た観客と違い、映画を止めて字幕を書き写すことも、聞き取れなかった言葉を再生することも可能である。この機能を使い映画の細部まで検討できた。

満映について論じた書籍はたくさんある。しかし映画表現されたものは、実際の映画を見るに如くはない。その意味で映画表現を研究テーマとする学生の要求に図書館は的確に応じている。しかし、映像資料の総量がまだまだ足りないように思われる。

## 私の図書館利用法

法科大学院 丸藻 統一

私は幼少時から本が好きだった。自己紹介の趣味欄には、迷いもなく「読書」と記入するし、外出時、鞆には必ず一冊本が入っている。本に限らず活字媒体であれば新聞であろうと、辞書であろうと何だって「読む」対象となっていると言って良い。自分にとって読書とは、もはや趣味を越えて「体の一部」となっているのかもしれない。

そんな私だが、10代半ばまでは不思議と図書館には足を運ばなかった。父親が自分と同様の、むしろ自分以上の読書家であったため、実家に本が大量にあったことも関係しているかもしれない。詳しい理由は定かではないが、図書館と縁がなかったことは確かであり、「本は借りるより買う」という意識が強かった。

こんな自分が図書館通いをするようになったのは、高校生の頃からであり、もっとも図書館に通い詰めたのは大学生活の4年間であろう。その利用方法は、「暇さえあれば図書館に行き、専ら自分の専攻とは関係ない分野の本を読み漁る」というものであった。分からないことがあれば、別の本を読み、その中で専門外の事項があれば、さらに別の本を借りる。毎回、別の分野の書棚に行き様々な図書を机まで持って行き読み耽る…。もちろん講義で提出するレポート作成のためにも利用したが、やはり講義とは関係ない所での利用の方が多いだろう。おそらく、自分の中では、「本とは知らない事項に接するツールであり、図書館はそのために利用する施設である」という認識が強かったのだと考えられる。

確かに、学習環境としての図書館は有用であるし、資料も設備も豊富に揃っている。しかし、時には専門分野を離れて、新しい分野に触れてみることも必要であろう。新しい発見に遭遇することで、人生はより豊かになっていくのであり、そのような機会は貴重である。そう考えると、図書館はまさに「知らないこと」の宝庫であり、人生を豊かにするために積極的に利用することをお勧めする。

## 待ってます！蔵書一同

豊橋図書館事務課 中山 欽司

豊橋図書館の閲覧カウンター係をしています。

韓国の医官『ホジュン(許浚)』という小説を読みたい、との問

合せがあり、名古屋図書館で所蔵していたので取寄せをした。依頼者は都合で直ぐに利用出来なくなったので、代わりに利用させてもらった。文庫本3冊を一気に読んだ。その後、語学教育研究室にホジュンのDVDがあることがわかり、利用させてもらった。韓国で10年前にテレビドラマとして放映され、当時話題となったとのことであるが、全く知らなかった。昔、朝鮮は身分差別の激しい国であった。賤民の子供が医者になるのは通常ではありえないことであったが、それはドラマ。各巻にそれぞれ見せ場があり、次が見たくなるように作られている。内容で強烈だったのは倭寇、すなわち豊臣秀吉の朝鮮征伐の戦火から医学書を守る場面があるが、この時代から両国の関係がこのようであったかを思い知った。

昨年夏、テレビで長崎県の軍艦島が若者の観光スポットとし脚光を浴びているとの放映があった。新刊図書コーナーの中に『軍艦島』を発見。何と太平洋戦争時に炭鉱地として朝鮮から多くの人を連れてきて強制労働させていた島ではないか。島から脱出することは容易でなかったが脱出成功。小説であるからには創作であるが、被害当事者の証言、日本にも4年間取材・執筆滞在され、15年かけて作品を完成させた。著者は、小説を読んだ人々がどのように生きていくべきか考えてもらえればと希望している。

読書は好きな時にすればいい。図書館には宝物が一杯ある。書架に収まってから誰の手にも取られていない資料もある。空いた時間を図書館で静かに過ごすことをお勧めします。

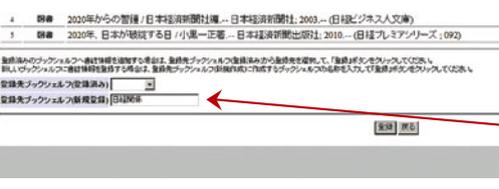
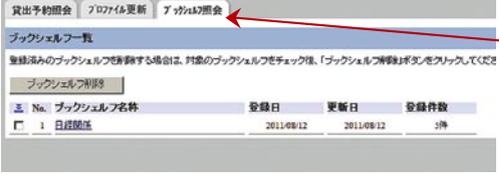


## OPAC機能紹介

2011年2月より、新しい図書館システム「新学術情報システム」が稼働し始めました。それにとまない、蔵書検索システム「OPAC」も新しくなり、機能が強化されました。今回はOPACの新しい機能「ブックセルフ登録」と、新しい機能ではありませんが、大変便利な機能「貸出予約照会」をご紹介します。

### ブックセルフ登録

ブックセルフ登録とは、OPACで検索した結果を保存しておく機能です。その利用方法をご紹介します。

	<p>従来と同じ手順で資料を検索します。</p> <p>↓</p> <p>検索結果が表示されたら、保存する資料にチェックを入れます。</p> <p>↓</p> <p><b>「ブックセルフ登録」</b>をクリックします。</p>
	<p>ログイン画面が表示されますので、愛知大学のメールアドレスと同じユーザID、パスワードを入力してログインします。</p> <p>※ログインできない場合は、図書館受付カウンターまでお問い合わせください。</p>
	<p>チェックを入れた資料の一覧が表示されます。</p> <p>↓</p> <p>画面左下にある<b>「登録先ブックセルフ(新規登録)」</b>の欄に任意のブックセルフ名称(グループ名)を入力して、「登録」をクリックします。</p>
	<p>トップメニューに戻り<b>「ブックセルフ照会」</b>タブをクリックすると、先程作成したブックセルフ名が表示されます。</p>

